
エイプリルフル

P 琢磨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エイプリルフール

【Nコード】

N2075S

【作者名】

P 琢磨

【あらすじ】

サドな子とバカな子の四月。

(前書き)

エイプリルフールの話だけど、エイプリルフールの話じゃありません。

「俺、今日死のうと思うんだ」

午前の授業が終わり、昼の休み時間に入った直後、花奈の席に虎司がやってきた。シヨンボリと頂垂れている虎司を見て、花奈は眼鏡を押し上げると不安そうな表情を作ってみせた。

「そうか、頑張れ！ 応援してるよ！」

「不安そうな表情とは裏腹な宣言にどうしたらいいか分かんねえよ俺！！」虎司が絶叫を奏でた。

「うん？ だって決意は固いんでしょ？ 私がどう止めても死ぬじゃない君」真顔で応じる花奈。

「決意が固いとか勝手に決めるなよ！！ そういう決めつけ判断が冤罪を生むんだぞ！！ 全俺に謝れ！！」

「むしろ全君をなじり倒したいところだけど今日は勘弁してあげよ。それで？ いつ死ぬの？」

花奈の同情の眼差しに気づいたのだろうか、虎司は複雑な表情になった。虎司の表情の機微に聡い花奈は、透かさず言葉を繋げた。

「いやごめん、私ちよつと言い過ぎたかも知れない」ポリポリと頬を掻いてちよつぱり反省する花奈。

「花奈ちゃん……」分かってくれたんだな、と言いたげに表情に喜色を混ぜる虎司。

「虎司の死ぬ決意を鈍らせるなんて野暮な真似しないよ。早く死ぬ」グツと親指を立て、笑顔で送り出してやろうと、会心の笑みを浮かべる花奈。

「違うだろ！？ 止めようよ！？ 俺達親友だろ！？ 親友と書いて“ダチ”と呼ぶ関係だろ！？ お前と俺の仲だろ！？」必死の顔で訴え始める虎司。

「え？ そうだったの？」キョトンとする花奈。

虎司は凄く爽やかな笑顔で涙を流し始めた。花奈はそれを眺めな

がら今日のお昼はどこコンビニにしようか、と考えを巡らせていた。

「なあ、花奈ちゃん。俺って死んだ方がいいのかな……？」しんみりとした声の虎司。

「死んだ方が良い人間なんてこの世にいる訳無いじゃない」キツパリと応じる花奈。虎司に笑顔が戻りかけたところで、ちゃんと言い添える。「君以外だけどね」

「花奈ちゃんのブアカアアアツツ！！ もう知らねツ、俺が死んでも知らないんだからな！？」半泣きになる虎司。

「そりゃ、君が死ぬ瞬間は私も知らない訳だけど」と前置きして、「君が死ねば嫌でも知れるさ。君が言うように、私と虎司は親友だからね」そつだ、今日はサンクスにしよう、と結論を出す花奈。

花奈が席を立つと、虎司は彼女の後に着きながら、「だよなあ、俺達って親友だよなあ、だったら俺が死ぬなんて言ったら絶対に止めるよなあ」とブツブツよく分からない事を呟き始めた。

「え？ 虎司、親友ってどういう事をする関係か、君は知らないのかい？」

廊下を歩きながら振り返ると、虎司の「あん？」とにやけた表情を殺しきれない間の抜けた顔に直面した花奈。

「親友って言うのはね、親友の行動を後押ししてあげる存在なんだよ。だから、虎司が死にたい！ って言うなら、私は全力で後押しするよ。君が途中で『嫌だ死にたくない、お願い助けて、こんなところで死ぬなんて嫌だ！』って言うおうが、暴れようが、泣き叫ぼうが、君が死ぬのを最期まで手伝うよ。そりゃもう全力で全身全霊を掛けて己を省みず限界を超えてもね」

爽やかな笑顔を浮かべて虎司を見ていた花奈だったが、何故か虎司の顔から凄い勢いで血の気が引いていく。その様子を見て花奈は「可愛いなあ」と心の中で満悦の笑みを浮かべる。

再び前を向いて階段を下りていく花奈。目指すサンクスは校舎から程近い場所にあるため、五分も掛からない。

「……待て、待って花奈ちゃん、落ち着いて考えようよ!!」花奈の背中から喚き声が飛ぶ。「親友が死のうつつで言ってるのに後押しするって全力で間違ってるじゃない!? ほら俺っ、もしかしたら一時の気の迷いで死にたいって言ってるかも知れないんだぜ!? それなのに死んだらすごい無駄死にじゃない!?」懸命に喚き散らす虎司を見て、本当に可愛いなあと思う花奈。

「そんな事無いさ」花奈は振り返らずに階段を下り続ける。今日は何の具のオニギリにしようかな、と考えながら。「虎司は気の迷いで死にたいなんて言わないよ。仮に気の迷いだとしても、死にたいなんて軽々しく口にした事に対して罪を負うべきだから、私がその罪を全力であがなわせるのは当然の行為だと思っただよね、親友として」

階段を下りきり、校舎の外に出る二人。春風が桜の花を舞い散らしている。気持ち良い風を全身に感じた花奈は、こういう日はシーチキンマヨがいいかも知れない、とぼんやり考えた。

「いや、えと、ほら、ね!? 俺だってほら、アレだよアレ! さつきまでは死にたかったけど、今は何か死にたくないな〜って思わない!?! ほうら思っただろ!?! 俺は実は死にたくないって事さ!?!」理解に苦しむ弁明を喚き散らす虎司。

「え?」横断歩道の前に立つと、信号が変わるのを待つために虎司を振り返る花奈。「虎司……まさか死にたくないの?」

「どんだけ俺を死なせたいの!?!」虎司が全力で絶叫を上げた。

「虎司を死なせたい訳無いじゃない。よく考えてご覧よ」信号を振り返ると、まだ青じゃない事を確認する花奈。「虎司を死なせたいだなんて、私がいつ言ったのさ?」

「直接的には言っていないけど、さつきから花奈ちゃんが言ってるのって、間接的に俺を殺したくて仕方ない風にしか聞こえないもの……」ゲッソリとした表情の虎司。

「全くこれだから虎司は」やれやれと肩を竦めると、青になった信号を視認して横断歩道を渡り始める花奈。「それで? いつ死ぬの

？」

「花奈ちゃんの苛めっ子オオオツツ！」虎司の何かが壊れた。それを見て明太子も捨て難いな、と思う花奈。「そんなに言うならツ、そんなに言うなら死んでやるよツ！！ どうせ花奈ちゃんは俺なんか死んだ方がいいって思ってるんだろ！？」

横断歩道を渡り終えた花奈は、虎司を振り返った。涙で顔がグシヤグシヤだ。マジ泣きするとは思ってたけど、やっぱり可愛いなあ虎司の泣き顔は、と内心で満面の笑みの花奈。

「虎司。私は虎司が、大好きだよ？」

突然の告白に驚いた虎司の顔から魂が抜けたのを見て、花奈が会心の笑みで決め台詞を吐く。

「だから、つい苛めちゃうんだよ」

そうだ、やっぱり今日のオニギリは牛タンにしようという決意を新たに、横断歩道を渡った先にあるサンクスへと入る花奈。ガラスの扉を押し開けると、軽やかな音が店内に鳴り響いた。

「えっ、ちよつと花奈ちゃツ」追っかけてきた虎司が閉まったガラスの扉に思いつきり顔を打ちつけた。花奈はそれを視認したが軽やかにスルーした。「いッ、今のツ、コケッ、」

「と、のど越し」花奈は背を向けたまま右手の親指を立てた。

「そしてキレ！」虎司がよく分からない魔法の呪文を唱えた。「じやなくて！！ 告白だよな！？」

「違っよ虎司。よく考えてご覧よ」オニギリのコーナーに入り、牛タンのオニギリが無い事にガツカリする花奈。「牛タンが売り切れてるって事だよ」

「ええ！？ ちよつと俺の頭じゃ分からない難題だぜ！」涙を拭いて花奈の隣に立つ虎司。

「そうでしょ？ じゃあ気にしたら……」明太子も無い……、と肩を落とす花奈。「……明太子も無くなっちゃった……」

「なるほどな！ じゃあこれにしようぜ！」虎司がすっと腕を伸ばして手にしたのは、「シーチキンマヨ！ やっぱこれしかないだろ

！」

花奈はそれを見て、極上の笑みを浮かべた。

「シーチキンマヨは無いわー」

虎司が物凄くガツカリした顔になったのを見て、花奈は虎司の手からシーチキンマヨを奪い取った。

「でも君が触れてしまった物を陳列棚に戻すのは他のお客様に大変な失礼だから、私が責任持って処理してあげるよ。感謝してね」

「まるで汚物みたいな扱いに全俺が号泣しそうですぜ！！」また泣き出す虎司。

レジで会計を済ませるためにシーチキンマヨのオニギリを差し出すと、隣からも一つオニギリが差し出された。見るとシーチキンマヨ。花奈が視線を持ち上げた先では、虎司が赤い目をして鼻の下を擦っていた。

「俺達、お揃いだな！」得意気な虎司を見て不快になる花奈。

「ご一緒で宜しいですか？」店員が花奈を見据えて尋ねる。

「はい。支払いは全虎司がしてくれるって噂だし」と言い置いて花奈はレジを離れる。

「それデマだよ確実に！？ ちょっ、あ、お箸はいりません！ あとストローも付けなくてください！ 袋は好きにして！」ヤンヤンと騒ぎ散らす虎司の声が遠くなる中、花奈はガラスの扉を押し開いた。

「はあ……」と困惑気味の店員の声を最後に、花奈は外に出た。

桜の雨が降っている。と、詩的な想いが湧いたのはきつと、死的な発言をした虎司のせいに違いない。そう、花奈は心の中で断じた。

花奈が横断歩道でまたも信号に捕まっていると、虎司がシーチキンマヨを二つ持って駆けて来る姿が見えた。またガラスの扉に顔をぶつけたのか、額と鼻の頭が赤い。花奈は思わず微笑んだ。

「おっ、お待たせ花奈ちゃん！ 今日俺のオゴリ！」そう言ってシーチキンマヨを差し出す虎司。

「そうだね、君は今日で人生が終わるんだ、今くらいオゴっておかないともうオゴる機会は無いしね」うんうん、と頷いてシーチキンマヨを受け取る花奈。「ところで、どうしていきなり死のうとか言い出したんだい？　こんな小春日和に死ぬだなんて、君はよほどロマンチストなんだね」と、朗らかな笑顔を浮かべた。

虎司は悪戯がバレた悪童のように「えへへ」と笑むと、「だってほら、今日ってエイプリルフルじゃん？　今日だけはどれだけ嘘を吐いてもいいんだろっ？」

花奈は虎司の顔を見つめたまま暫し物思いに耽ると、信号が赤から青に変わるくらいの時間思考してから、ようやくと歩き出した。

「虎司。今日は四月の十一日。四月の一日じゃないんだ。後は分かるね？」

「ん？　だから今日はエイプリルフルだろ？」何を言ってるんだと言い返す虎司。

横断歩道を渡りながら頭をポリポリ搔くと、まあいいかと、花奈は思考を放棄した。大方、一日と十一日を勘違いしてるだけのだろうと、適当に断ずる。

「虎司」横断歩道を渡り終え、花奈は虎司を振り返った。

「おう！」横断歩道を渡り終えた虎司が敬礼する。

「大嫌いだ」穏やかな笑顔で告げる花奈。

「俺もだ！」言ってから、凄く嬉しそうな顔になる虎司。

「あと愛してる」と指差してから、眼鏡を押し上げる花奈。

虎司は途端に絶望した顔になり、シーチキンマヨを取り落とした。「なんてね」落ちたシーチキンマヨを手にとると、自分のと交換して虎司に手渡す花奈。それから校舎に向かい、シーチキンマヨを軽く空に向けて飛ばした。落ちてきたシーチキンマヨを受け取れず、べしゃ、と桜の絨毯に落下して、形が変わってしまった。

それを拾うと、虎司を見ないように立ち上がる。

「それにさ、私は虎司を苛めるのが好きなんだから、勝手に死なれちゃ困るよ」

そう言つと口許に笑みが浮かんできた。花奈はそれを隠すように
シーチキンマヨを口に近づけ、虎司を振り返る。

「どれくらい困るんだ？」虎司が無然とした面持ちで見ている。

続く台詞を言つと虎司を喜ばしてしまうのが難点だが、そう
だ今日はエイプリルフールになったのだったな、と思い出して花奈
は笑いかけた。

「私にとっては死活問題だね」

【了】

（後書き）

元からあってないようなクオリティですけど、最近劣化が著しい気がするので五月の時季ネタ短編は更新できるか判りませぬ．．無駄に連載を増やした弊害なのは間違いないです（笑）

でもまだ連載したい作品がいくつかあるんだ．．流石に自重します！（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2075s/>

エイプリルフル

2011年4月4日14時08分発行